COVID-19 禍における国際看護教育オンライン研修の取り組みと課題

Challenge to training in international nursing education in the COVID-19

○横山詞果[1]，江角伸吾[2]，大植崇[3]，堀込由紀[4]，呉小玉[5]
Fumika Yokoyama, Shingo Esumi, Takashi Ohue, Yuki Horigome, Xiaoyu Wu
1 滋賀県立大学，2 自治医科大学，3 兵庫大学，4 群馬パース大学，5 京都光華女子大学
University of Shiga Prefecture, Jichi Medical University, Hyogo University,
Gunma Paz University, Kyoto Koka Women's University

【背景・目的】

2020 年、COVID-19 の世界的流行を受け、看護基礎教育では遠隔講義の導入が急速に促進され、教育内容・方法を検討することが急務となった。さらに国際看護教育においては、渡航制限・停止措置により、学生の留学や国際交流の機会を失い、学習環境が制限される事態となった。従来と異なった形式での国際看護教育が求められるようになったが、対面以外の教育方法の一つとしてのオンライン活用の効果や可能性に関する研究は多くない。そこで、日本国際看護学会教育活動・研修委員会では、この制限された環境のなかで、より良い教育内容・方法を考案していく機会を提供することを目的に、オンラインでの研修会を実施した。本活動報告では、看護基礎教育における国際看護教育のオンライン研修の取り組みと課題を報告する。

【研修内容】

本研修会は、「オンラインで効果的に実施する国際看護学教育のヒントを得る」ことを目的に、2 部形式で実施した。

第 1 部ではシンポジウム形式とし、2 名の講師からは各大学のオンラインを利用した国際看護学の講義に関する内容、1 名の講師からは、オンラインを用いた国際交流の取り組みに関する内容の発表であった。いずれも授業や国際交流の構成・内容、利用したオンラインシステムの紹介や活用方法、英語でのプレゼンテーションや海外文献を用いたレポート課題等であった。第 2 部では、参加者を 5～6 名のグループに分けたブレイクアウトセッションを利用して、オンライン教育で工夫している点や困っている点等についてグループワークを実施した。

【研修およびアンケート結果】

研修会の参加者は 18 名、参加者全員が教育機関において国際看護教育に携わる教員であった。所要時間は、シンポジウムが 2 時間、グループワークが 1 時間 20 分であった。

オンライン研修会終了後に実施した web アンケートは、第 1 部シンポジウムに関する設問 2 問、第 2 部グループワークに関する設問 4 問、研修全体としての設問 1 問の計 7 問からなり、5 段階法で回答を得た。さらに、研修会における意見や感想の自由記述欄を設けた。研修参加者へは、アンケートへの協力は任意であり、匿名性を確保すること、アンケート結果は HP 等で社会へ公表することを文書と口頭で説明し、同意を得ることができたアンケート結果のみ集計した。アンケートへの回答は 10 名から得た（回収率 56%）。

第 1 部シンポジウム：シンポジウムのテーマは 7 名が“適切”だったと回答し、“やや適切”“どちらでもない”“適切ではなかった”が各 1 名であった。シンポジウムの時間は、2 名が“適切”“やや適切” であり、8 名が“どちらでもない”であった。

第 2 部グループワーク：グループワークのテーマは、5 名が“適切”“やや適切”、4 名が“どちらでもない”との回答であった。グループ人数については、8 名が“どちらともいえない”との回答であり、1 名が“やや適切でない”であった。グループワークの時間は、8 名が“どちらでもない”であった。ディスカッションの満足感は、6 名が“やや満足”、3 名が“満足”であった。

研修全体：オンライン研修の参加のしやすさについては、6 名が“参加しやすかった”、4 名が“やや参加しやすかった”であった。

自由記載：「授業の構成や研修の工夫に活かせる」等、実際に活用できる手ごたえを得ていた。また、「異文化理解のゲームを活用したい」「異文化コミュニケーションの文献を活用する」等、具体的な教育方法が得られていた。グループワークでは、「様々に意見交換ができた」や、「初めてのオンライン上でのグループワークだったがスムーズにでき、良い時間となった」「自宅から気軽に参加できた」の回答が得られた。

【考察】

自由記載やテーマに関する回答より、「オンラインで効果的に実施する国際看護学教育のヒントを得る」という目的は概ね達成されたと考える。また、オンラインを用いたグループワークの満足度も高く、オンラインの研修は、感染予防に加えて、グループワークも可能であり、参加しやすく、新たな知見が得やすいメリットがあったと考える。COVID-19 パンデミックにより急遽課せられた教育内容・方法の変換に、参加者は手探りで対応し困難感を抱いていたことが推測され、本研修会の目的が参加者のニーズに合致したと考えられる。

課題として、グループワークのテーマについて、「どちらでもない」と回答した人が多かった。グループワークのテーマ設定の工夫が求められる。また、シンポジウムやグループワークの時間については、「どちらでもない」と回答した人が多かった。研修会の時間配分については改善すべき課題である。

なお、本報告は日本国際看護学会 2020 年度 西・東日本研修会報告書に加筆修正を加えたものである。また、本活動報告における利益相反は存在しない。